2017 年度　春の大セミナー

5th C++テーブル　総評

文責：豊嶋哲也（立教 4）

【目次】

1. テーブルメンバー
2. 議論の流れ
3. 全体総評
4. 順位と選定理由
5. 感想＋メッセージ

【1.テーブルメンバー】

近藤（獨協 3）　新谷（青学 3）　橋本（明治 3）　花形（明学 3）
弟子丸（青学 2）　黒沢（高経 3）　冨永（慶應 2）

【2.議論の流れ】

アイデアの認識等でずれがあるかもしれませんが、ご了承ください。
NFC で主に時間を割いたテーブルだったので、アイデア、その収束に関して個人的なコメントを書いておきます。

《OP 決めまで》

OP には 5 人が立候補。全員が臓器移植をトピックとしており、冨永（慶應 2）は、脳死患者が臓器の摘出に同意している場合は、家族の意思を伴わず臓器を摘出でき、その他の場合は現状を維持する、という政策、他の 4 人は全脳死患者から臓器を摘出できる、という政策であった。QA タイム・投票を経て、近藤（獨協 3）が OP に選ばれる。

《ASQ》

ASQ サイドでは、vague ワードの確認、AD の立論方法、OP のスタンスやコンパリソンアイデアに関する介入に時間を割く。Harm エリアにおいて、花形（明学 3）から「コンパリを見据えて TG の rsn for will を変更したい。」との提案もあったが、OP のスタンス、定義に変更、反論などはなく NFC エリアへ。

《NFC》

NFC エリアでは warrant に対して 3 つのアイデアが提示された。

・黒沢（高経 3）の反論

黒沢の反論は、「脳死患者は現状において回復する方法（可能性）があり、脳死患者を救うことで OP の TG も救うことができるため、×NFC。」というアイデアだった。橋本（明治 3）、新谷（青学 3）らによって Q が重ねられるも、各センテンスで何を prove したいのかを明確にすることができず、一時議論が停滞。30 分ほどアイデア理解に費やしたのち、近藤の介入により、rsn for warrant と×NFC の linkage が「日本政府へのメリットがより大きい。」というものだと明らかになる。この発言を受けて、近藤によりコンパリエリアで本当にメリットが大きいか話そう、という提案がなされ、NFC においての議論が収束した。

→時間をかけた割には少々雑に流れたという印象。流すのか、結論を出すのか、どちらかの強い意志を持った介入がテーブルとして欠けていたと感じた。また、help B/D→help TG→m/s/b というストリームが用意されていたにもかかわらず、help TG の部分を検証せずに S を出したことに対して、アーギュメンターの意図を汲めているのか、という懸念も抱いた。結果的に流れたからよかったが、インテを汲みきれないまま速めに S を出すことは、不要なごねを招くリスクがあることを覚えておいてほしい。

・弟子丸（青学 2）の反論

弟子丸の反論は、「日本政府は問題解決に向けて努力しており、SQ においても maximum TG を救うことができるため、×NFC。」というアイデアだった。弟子丸は effort の意味として、①医療技術の進歩、②臓器数の増加、を挙げ、これらの effort を続けることによって最大人数を救うことができる、というアイデアであると述べられた。こちらも先ほどのアイデア同様、アイデア理解のための QC に時間を割く。途中、近藤や橋本により「APA のほうがより早く maximum に到達するので、T/P するべき。」というアイデアが show されるも、深く検証されることなく、停滞の時間が生まれる。最終的に近藤が「NFC を否定するには TG そのものを否定しなければならないが、その点はコモンとなっているので、とりあえず後で話そう。」という提案がなされ、この提案を弟子丸が受け入れたことにより、NFC での議論が収束する。

→検証の際、ダウトの提示、それが通らなかったことを受けて流しの S を出したという点はよかったと思う。一つの収束方法に固執することは、時間を多く使う恐れがあるからだ。しかし、内容面に関してアーギュメンターに寄り過ぎなのではないかと感じた。具体的には、

keep SQ→help maximum というストリームを認めるような意見提示を行っていたことである。いくら過去の tendency を用いていようと、現状を維持することで、将来 problem を solve できるようになるかは、完全に unclear である。この部分の主張が誰からもなされていなかった。仮にこのまま議論が進むと、AD 側に不当・不要なエフェクトがつく恐れがある。相手の土俵に乗ってアイデアを検証する姿勢は大事だが、どの部分を認め、どの部分を認めないか、その見極めをしながら検証するよう心掛けてほしい。

・新谷の反論

新谷の反論は、「rejection が起こった場合、×m/s/b となるので、×NFC。」というアイデアだった。橋本の介入により、新谷のインテが「m/s/b for TG を確認しない限り T/P できない。」というものだと判明する。近藤らの介入で、とりあえず NFC を prove してコンパリ前にどう treat するか決めよう、的な雰囲気が流れ始める。そこで花形から、「残り時間を考慮して、sol をスキップして今からコンパリを始めたい。」との提案がなされる。その妥当性に冨永（慶應 2）らがダウトを持つも、近藤の介入でひとまず NFC を prove し、花形の提案を理解したのち投票を行うことに。投票の結果、7 人中 4 人が花形の提案に賛成する意思を見せるも、冨永が過半数の意思により提案が通ること自体にもダウトを提示し、結局スキップするか否かは曖昧なまま次へ進むこととなる。

→早い段階で相手のインテを引き出せた点や、残り時間を考慮してプロシを変更しようとする S を提示し結論を得ようとする姿勢に好印象を持った。結果的にプロシ変更は行われなかったが、最後のテーブルにおいても、議論を楽しもうとする姿勢は大事である。一つ懸念を抱いたのは、多数決で変更を行うか否か決定しようとした点である。Sol をスキップするということは、オピニオンを未検証の状態でコンパリへ移る、ということとなり、これは narrow でのコンセに反する。コンセに反する S は、テーブルメンバー全員の同意がない限り通ってはならない。そのため、冨永のダウトには妥当性を感じていたが、前述の理由付けが不足していたため、方向性が明確にならなかったのは残念であった。

《PLAN》

Sol において冨永が意見を提示。NFC での議論から、できるだけ早くコンパリにたどり着きたい、という雰囲気が流れていたためか、主張を change M としていた。内容は自身のオピニオンシートに基づくもので、この内容理解の最中にディスカッション終了となった。

【3.全体総評】

ディスカッション中のアトモスや、全員が議論に参加していた点はすごく評価できるものでした。しかし、序盤からコンパリを見据えたQやSを積極的にしていた割に、コンパリにたどり着けなかったという点で、内容に関しては課題の残るものだったと思います。コンパリにたどり着けなかった要因として二つ挙げさせていただきます。

①OP決め

このテーブルに限らず、春セミ期の多くのテーブルで行われていたことですが、OP決めの際に話されていた内容がほぼコンパリアイデアに関することだったことに懸念を抱きます。OP決めの際にコンパリアイデアをshowする必要性は、

・自身がコンパリの準備もしてきているというアピール

・他のcandidateとの相違点

この二つを示すためだと思いますが、逆に言うとこれ以上の必要性はありません。しかし、ほとんどのcandidateがアイデアを深く説明し、Qtimeでもアイデアに関する質問のみが相次ぐ、ということが多かったと思います。このことが引き起こすデメリットは、単純にOPが決まるまでに時間を要するほかに、SQにおいてもgetADとは関係のない、アイデアやスタンスに関する介入を増やしてしまい、かえってコンパリにたどり着かない、というものです。現に今回のテーブルでもそうでした。OPにとってget AD以上に大事なものはありません。このような本末転倒なディスを避けるためにも、OP決めから考えて議論してほしいと思います。

②推進力

ASQ、NFCエリアにおいて特に顕著だったのが、推進力を持った者、介入の不足だと思います。アイデア検証では、各々が考えるQに時間を割き過ぎた末に、オピメのオーソリに負けてSに乗る、という場面が目立ちました。Sの内容はC++テーブルにいる者ならだれでもできるような比較的平凡な内容だったと思うので、誰か一人が積極的に介入をし、もっと早くSを出すことができていれば、違う結果が出ていたでしょう。そのため、自分の話が終わっていない段階で他人の介入を防ぐことを、（少なくとも僕は）遮りだとは思いません。なので、自分一人で終わらせる、という強い意志をもって議論を推進することを意識してください。アッセンで一位を獲得するためにはこの力が必要です。

【4.順位と選定理由】

1位　近藤（獨協3）

OPとして議論の進度に貢献した点、NFCでの反論に対してのコンスタントな介入と、反論を収束させるSを打っていた点を評価し一位とした。課題は前述のとおり、推進力であると考える。NFCにおいて、他者の介入が相次いだにもかかわらず近藤のSにより議論が収束した点を考えると、近藤一人で議論を収束させることができたと考える。そのための先発的な介入を行うことができていれば、もっといい結論が得られていただろう。基礎的なスキルは高いと感じたので、アッセンに向けてこの点を意識してほしい。

2位　橋本（明治3）

ASQ、NFCにおいてコンスタントなQCを行っていた点を評価した。一部の議論は彼の介入をきっかけに収束したので、その質も決して悪くなかったと考える。一位との差はSの有無である。NFCでの反論を収束させていたのが橋本だったら順位は違っていただろうし、収束できるだけの実力は備えていると感じたので、この場面でどのように議論を収束させるか、この点を意識してアッセンに臨んでほしい。

3位　新谷（青学3）

NFCにおいて意見を提示した点と、コンスタントな介入を評価した。しかし、アイデアは深く検証されることがなかったうえ、他人に自身のアイデアへのトリートを許してしまった点、上位二名と比較すると介入量が少なかったことでこの結果となった。テーブルにおける役割の結果この結果となってしまったので、一位になるためにはどのような役割が求められているのかを考えてアッセンに臨んでほしい。

4位　黒沢（高経3）

自身の論に基づくQや反論を評価した。決してプレパ環境に恵まれていなかったであろう中で、今回の結果を残せたことは誇りに思ってほしい。上位3名との差はCやSの介入が見られなかったことである。上位に入るために他者介入は必須であるため、アッセンではCやSなど積極的にトライしてほしい。

5位　花形（明学3）

OPの定義や、プロシージャー変更に関して積極的にSを打っていた点を評価した。最後まで議論を楽しく、結論の得られるものにしようという姿勢は好印象であったが、Sにテーブルを乗せることができなかったこと、その他の介入が限定的であったことから5位となった。Sにトライすることは悪いことではないので、どうすれば

乗ってもらえるかを意識しながらトライしてほしい。

6位　弟子丸（青学2）

反論の提示とQでの介入を評価した。2年生ながらC++テーブルに入ったということで、基礎的なスキルは高いものだと考える。その点は自信を持ったうえで、今回の議論において足りなかった点をよく考え、今後のディス界を引っ張る存在になってほしい。

7位　冨永（慶應2）

介入は限定的であったが、自身の考えをQやダウトという形で提示していた点を評価した。前述のとおり、ダウトには妥当なものもあったと考えているので、どのようにすればテーブルの同意を得られるか考えながら今後は介入してほしい。弟子丸同様、2年生ながらこのテーブルに残ったことを自信にして、今後の成長につなげてほしい。

【5.感想＋メッセージ】

皆さん本当に春セミお疲れさまでした！いろいろ書きましたが、最後までいいアトモスを維持し、楽しい議論をしようとしていて、ジャッジの僕も楽しく春セミを終えることができました。アッセン、それ以外のディスでも、この気持ちを忘れずにディスカッションに臨んでほしいと思います。

このテーブルにいた皆に限らず、春セミでの自分の結果はどうだったでしょう？
きっと満足している人は少ないと思います。満足していない人たちへ僕が聞きたいのは、「この結果に悔しさを持っているか、満足はしていないけど納得はしているか。」です。悔しいと思った人は、きっと全力で春セミに臨んで、それでもその結果になってしまった、ということですよね。その人たちには、その全力さ、悔しさを忘れずにアッセンに臨んでほしいです。どっかの誰かも言っていましたが、この思いを持っている人は必ず強くなる。その思いをもってアッセンに臨み、”revenge”を果たしてほしいと思います。

では逆にあまり悔しくないなあ、とこの結果に納得している人はいませんか？僕は昨年こちら側の人間でした。なぜ悔しくないか。それはやはり、この春セミ期、まだまだ努力する余地があったということだと思います。言い換えれば、まだまだ成長できる余地があるということです。これから、春セミ期を上回る努力をすれば、アッセ

ンで逆転することも十分可能だし、きっと満足して3年生は引退、2年生は次シーズンを迎えることができると思います。だから、これが自分の限界と決めつけずに、もう少し頑張ってみてください。

長々と偉そうに失礼しました。しかもありきたりなコメントで申し訳ないです。わからないことや聞きたいことがあれば気軽に連絡ください！

立教大学4年
豊嶋哲也（さりー）